

とぞでもない。弟子ともいえない。だが、どんな類案も、師匠本孝をしている。そう思い始めたのは、7、8年ほど前からだった。ずっと気になっていた古井里先生の「あなたは、永劫帰郷について書いてみたい」という言葉。東京・新宿の中華料理屋で老酒を飲みながら語ってくれたお話に、私はすぐに自らの未熟さゆえに認め

だ。あまりの視線の強さに、私は「はい」とも、「無理です、先生...」とも言えず、「永劫...帰郷...。そう...ですよね」と答えるが、たまに海外も含め現代文学最高峰の作家の言は、訃報が入った刹那から、恐怖や畏怖に変わったかのようだ。「魂が宙に浮いて、恐怖に凍り、我が身をまた現世に戻ってくる先生の

静まり返って見ている。そして、文学の在り方を、私はもはや天地がひっくり返るほどに驚奇跡に近いものとして見ていた。連句のような心象の核の漂いと、死者たちをも引き寄せた集合的自裁でも呼ぶべきものなせる秘儀。私が同じような先生の文章が、いろいろな人の言葉で聞こえてくるのだ。言語体系の境界を越えて、だが、「そこだ」と先生はまた現世に戻ってくる先生の

た。その他の部門の最優秀賞は次の通り。(敬称略) △エッセー部門中学生の部、広島学院中(広島市)2年加納怜「自由と無関心の色」△同高校生部、慶応義塾女子高(東京都)3年与謝野久璃子「グットモーニング、不長少女」△読書体験部門中学生の部、甲南女子中(神戸市)3年加藤優月「『かがみの孤城』と出会ってから」△同高校生の部、白百合学園高(東京都)2年黒谷京叶「私のwhat ifs」

頸髄症



脊椎のお

医療法人社団 博豊会 八王子脊椎外科クリニック

広告

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならぬ」と考える「園」の職員「さとく」と、目が良さを帯びながら、しかし自由におもてなしができる人「おきーちゃん」という人物をつくりました。きーちゃんは積みの中で「なぜ、在るのか」と

死刑被告と同じ論理

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を差別する。植松被告、私は「さとく」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に同法は「さとく」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。



辺見庸さん

考え続けます。私たちが「存在してしまふ」ことは、主體的にあるのではなく「気が付いたらさつた」という偶然によるものです。偽装 意惑とは関係なく「在つてしまふ」という存在について

私たちは何となく「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」なら、それを決めることはできません。けれど日本社会とは長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をして

いる。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で良

い社員、かそうでないかをよ

い人たちの「共生」「純

で「さとく」は「社会的産

き進んだ時の論理を、「そら

へんみ・よつさん 1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノンイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起末装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼(め)の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」など著書多数。



「月」の表紙

「月」寓意(ぐら)に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年に出版された。物語は「園」に入所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動はず、目が良すぎ、思ふように話せないきーちゃんは、自分を見な者が「ありきたりの(善意)」から発する「おどろおどろの文言(オキズクニ...)」や「あからさまな嘆息」で自身の姿を想像する。「在りつづけることを誰かに請われているわけもなく誰にも分かってももらえない痛みを抱えながら在ることを考え続けるきーちゃんは、たれよりもそちらをよくは職員のさとくに心を許している。だがさとくにはある日(敵対者の空気をまとってやって来る。



殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」(相模原市緑区) (2016年)

相模原殺傷事件判決へ 辺見庸さんに聞く

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、さねむもがなの前提が私たちの内面できつとくに破壊していたことを、あらわにしたからで

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の植松被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。